

バッハ研究の第一人者リリングが指導 緑の地でカンタータを学ぶ

第2回 テューリンゲン バッハ・カンタータ・アカデミー

8月9～21日●ワイマール、ミュールハウゼン、アルンシュタット、
オーバーワイマール、アイゼナハ、ライブツィヒ

取材・文=中 東生

バッハ一族が栄えたテューリンゲン州の各地にまたがって、復活祭の前後に「バッハ週間」が催されているが、近年の成功に伴って昨年からはバッハ・カンタータ・アカデミーが8月に開催されるようになった。

これはバッハ研究第一人者のヘルムート・リリングの指導で行われており、今年は18国籍63人が参加した。応募の動機は、昨年の受講者に誘われたり、先生に勧められたり、またはリリングに学びたいために追いかけてきたり、など様々だが、二人の日本人受講者は、なんとツイッターでその存在を知ったという。参加費は無料に近い上、旅費の補助金として、ドイツ国内は150ユーロ、ヨーロッパで250ユーロ、その他の大陸には700ユーロが提供されたという。グループ練習はワイマールのフランツ・リスト音楽大学で、リハーサルはコンサート会場となる教会で行われ、宿泊は4つ星のドリントホテル、バッハ縁の地を巡るツアーも組み込まれていて、至れり尽くせりだ。

今年のプログラムには「カンタータ第71番《神はわが王なり》BWV71、「同第106番《神の時は最上の時なり》BWV106、「同第4番《キリストは死のとりことなれり》BWV4、「同第131番《深き淵から、主よ、汝に呼びかけん》BWV131、「同第70番《目覚めよ、祈れ》BWV70、「同147番《心と口と行いと生活で》BWV147の6曲が選ばれた。

8月9日に顔を合わせた受講生たちは、すぐにパート別に分けられ、それぞれのインストラクターの指導を受けたが、このインストラクターの評判がよく、どのグループも高度な指導でしっかりとした基礎を築き上げていた。合唱はミネソタ大学の合唱指揮者、オレゴンのバッハ・コーラス・アカデミー指揮者でもあるキャシー・サルツマン・ロメイ、ヴァイオリンはバンベルク響の元コン

サートマスター、ヴァルター・フォルヒェルト、ヴィオラはベルリン放送響の元ソロ奏者であるエーリッヒ・クリューガー、通奏低音はベルリン・ドイツ響所属のダヴィド・アドリアン、木管はカメラータ・ザルツブルクのソロ・オーボエ奏者マティアス・ベッカー、トランペットはハンブルク州立歌劇場の副首席奏者エックハルト・シュミットが担当した。

そうして15日からミュールハウゼンとアルンシュタット、オーバーワイマールで2回ずつ

計6回のトークコンサートが始まった。カンタータを1曲ずつ、モチーフなどを説明しながら細切れに演奏していき、最後に1回通すという形式だが、リリングのトークは大変興味深く、教会のバルコニーでの立ち見席まで、熱心な聴衆であふれ、入場できない人たちが教会の入口に溢れた。

独唱はリリングが選んだ若手の実力派たちだ。ドイツ人ソプラノのユリア・ゾフィ・ヴァーグナーはまだ20歳代前半らしいが、声は小ぶりでも信頼のおけるテクニックを持っている。アルトはヴァイオリン科も卒業しているスペイン人のリディア・ヴィニェス・クルティスで、体の使い方が多少固いが、自然な深い響きが低音から高音まで統一された歌唱が心地よい。アメリカ人テノールのニコラス・ファンは境界線ギリギリまでオペラティックな歌い方なのだが、やはり高音までどの音域を歌わせても表現力豊か



ヘルムート・リリングは指導にトーク・コンサート、指揮と大車輪の活躍



オーバーワイマールにある聖ペーター&パウロ教会におけるコンサートの様子



フローベに向かうリリング（中央）とユリア・ゾフィ・ヴァーグナー（S、左）



アイゼナハのゲオルゲン教会。バッハが洗礼を受けた洗礼台が見える

で、頭声に逃げずに歌い切るテクニックには安心感がある。ドイツ人のバリトン、トビアス・ベルントは声に躍動感があり、彼のオペラも聴いてみたいと思わせる表現力をもってバッハの音楽に生命力を与えていた。

修了コンサートではアイゼナハの、バッハが洗礼を受けたゲオルゲン教会と、ライブツィヒのトーマス教会で、前述のカンタータの後者3曲を披露した。バッハが洗礼を受けた洗礼台を囲むように並んだオーケストラで奏でるバッハはやはり格別だ。受講者も「バッハが生きていた場所で、バッハの専門家たちと勉強するバッハのカンタータは、まさに生きた音楽になる」と口を揃える。バッハ生誕330年目の今年、この地でまたバッハは63人の若者たちに音楽の息吹を吹き込んだであろう。受講生同士がとてつもない雰囲気でも過ごせたという2週間が終わるのが、誰にも名残惜しそうであった。